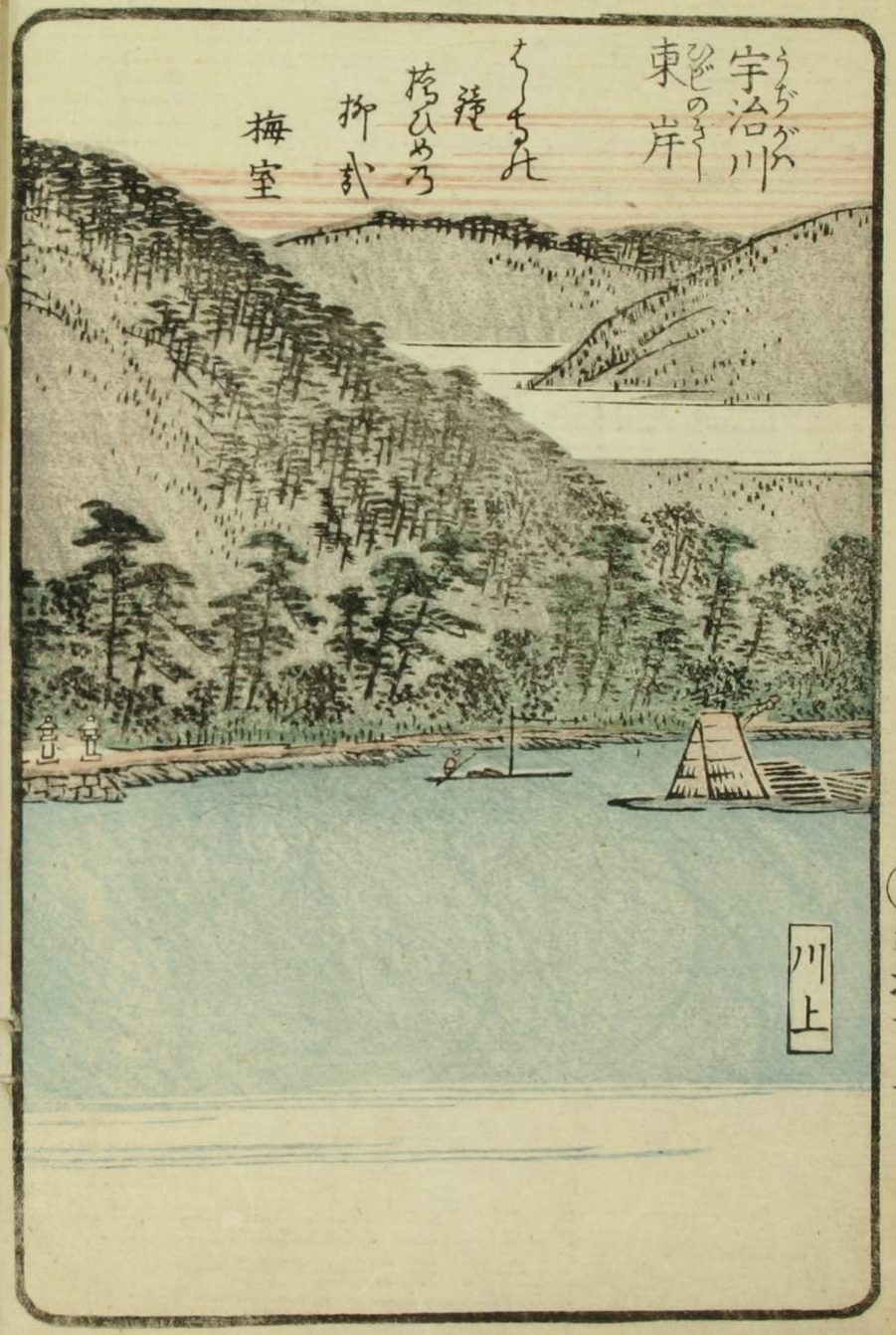
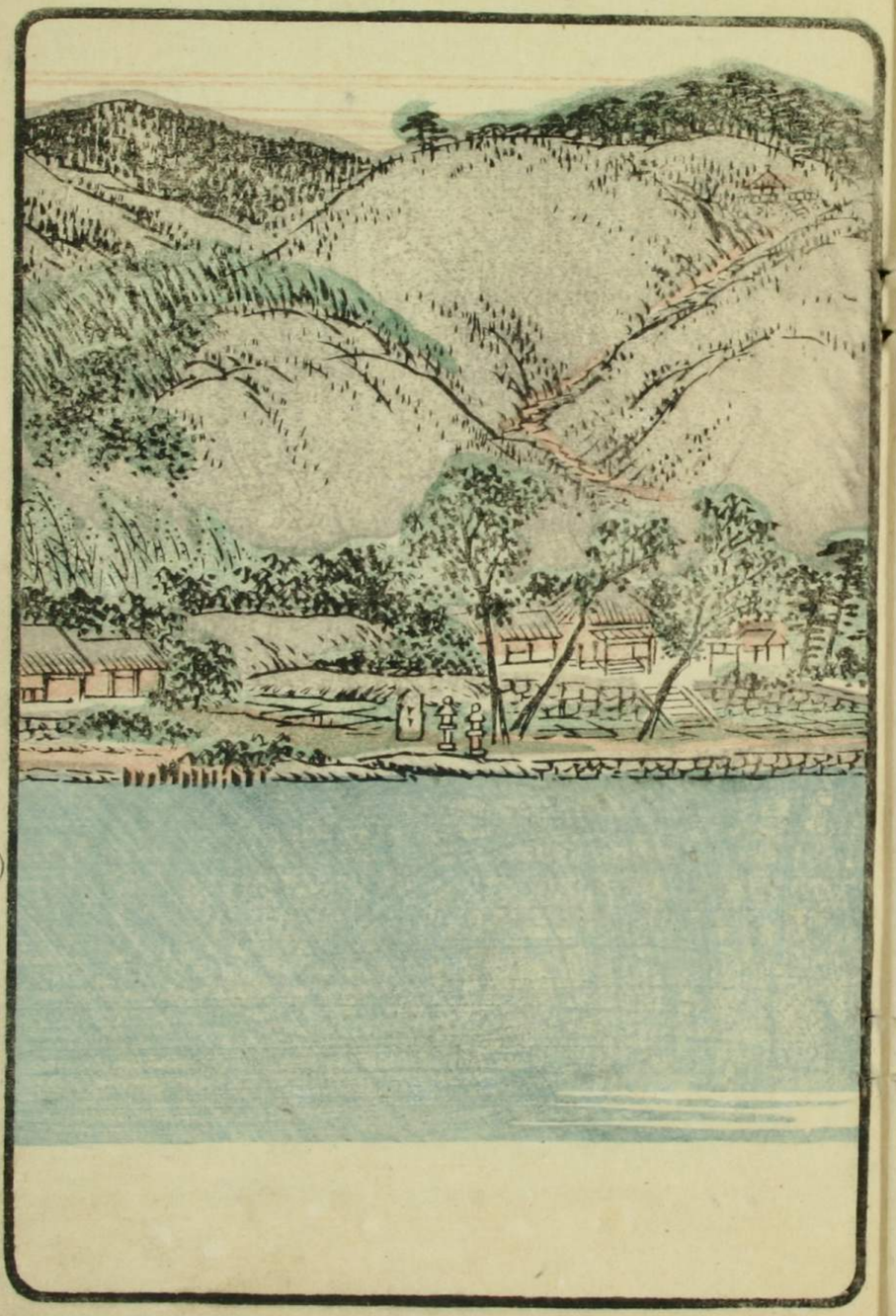
家康公御一代覺

坤

ル 4
3762
2

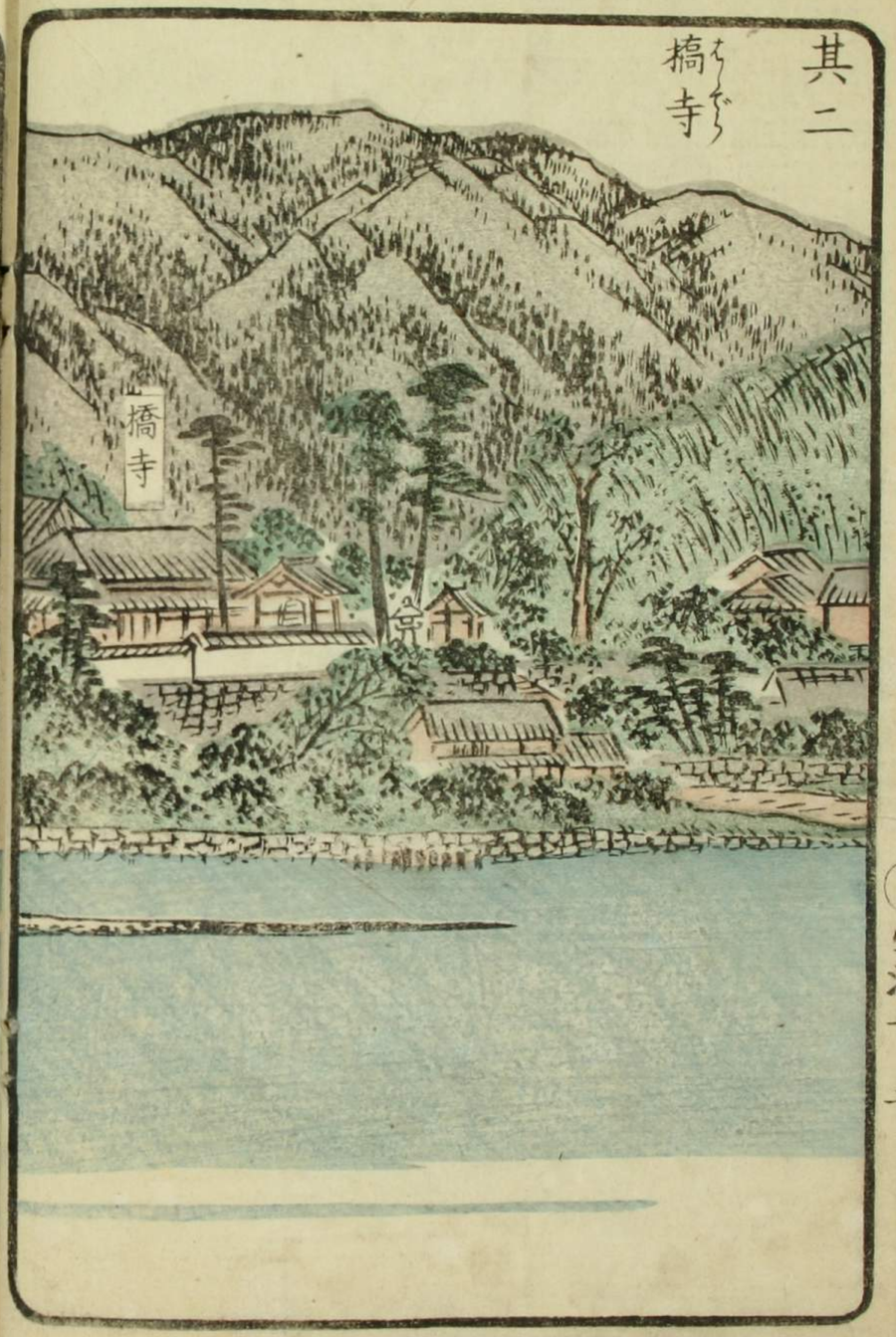
門 ル4
號 3762
巻 2
早稲田大學圖書館
記 2511.5
藏 非

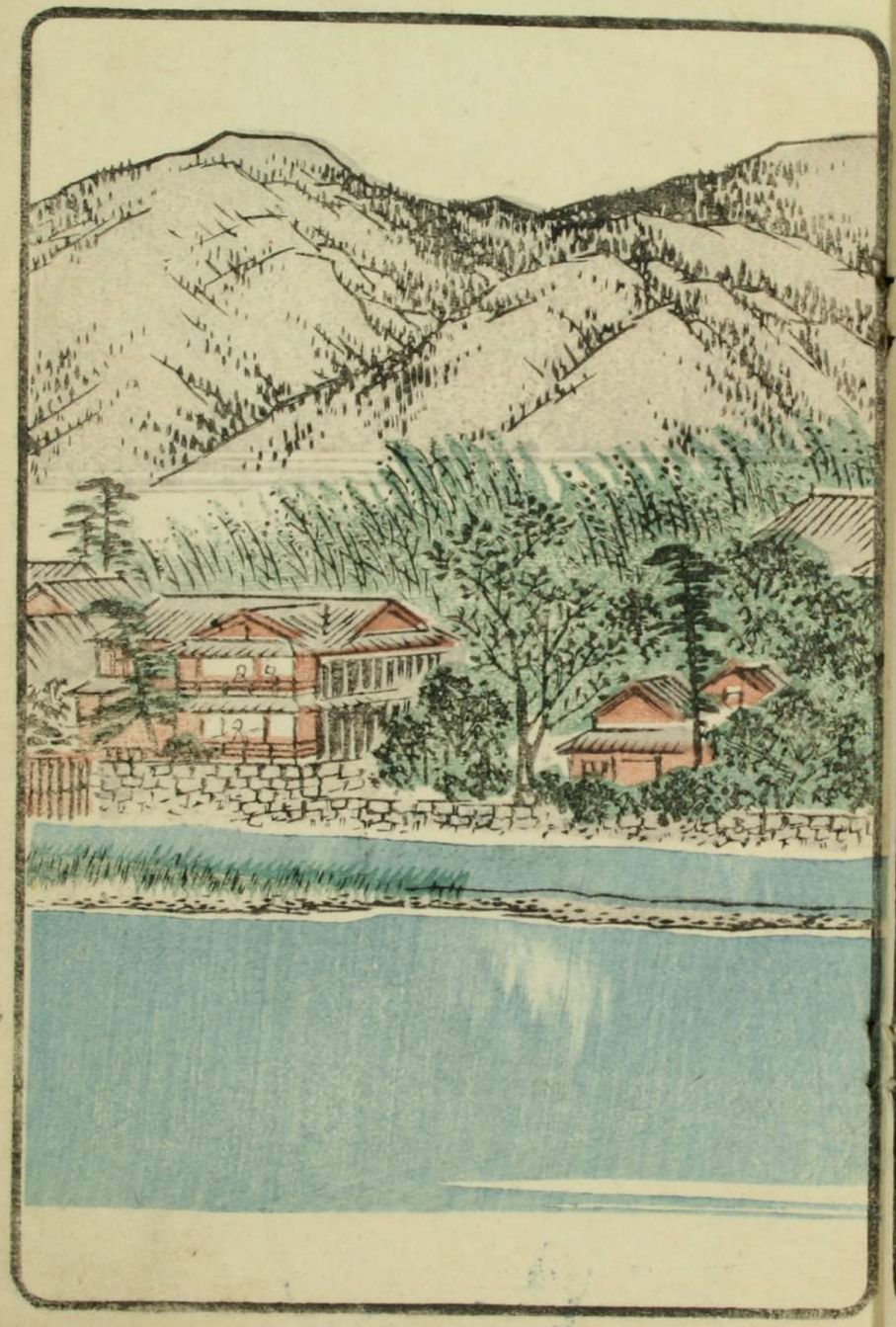

宇治川
東岸
柳
抑武
梅室
川上



其二

橋寺



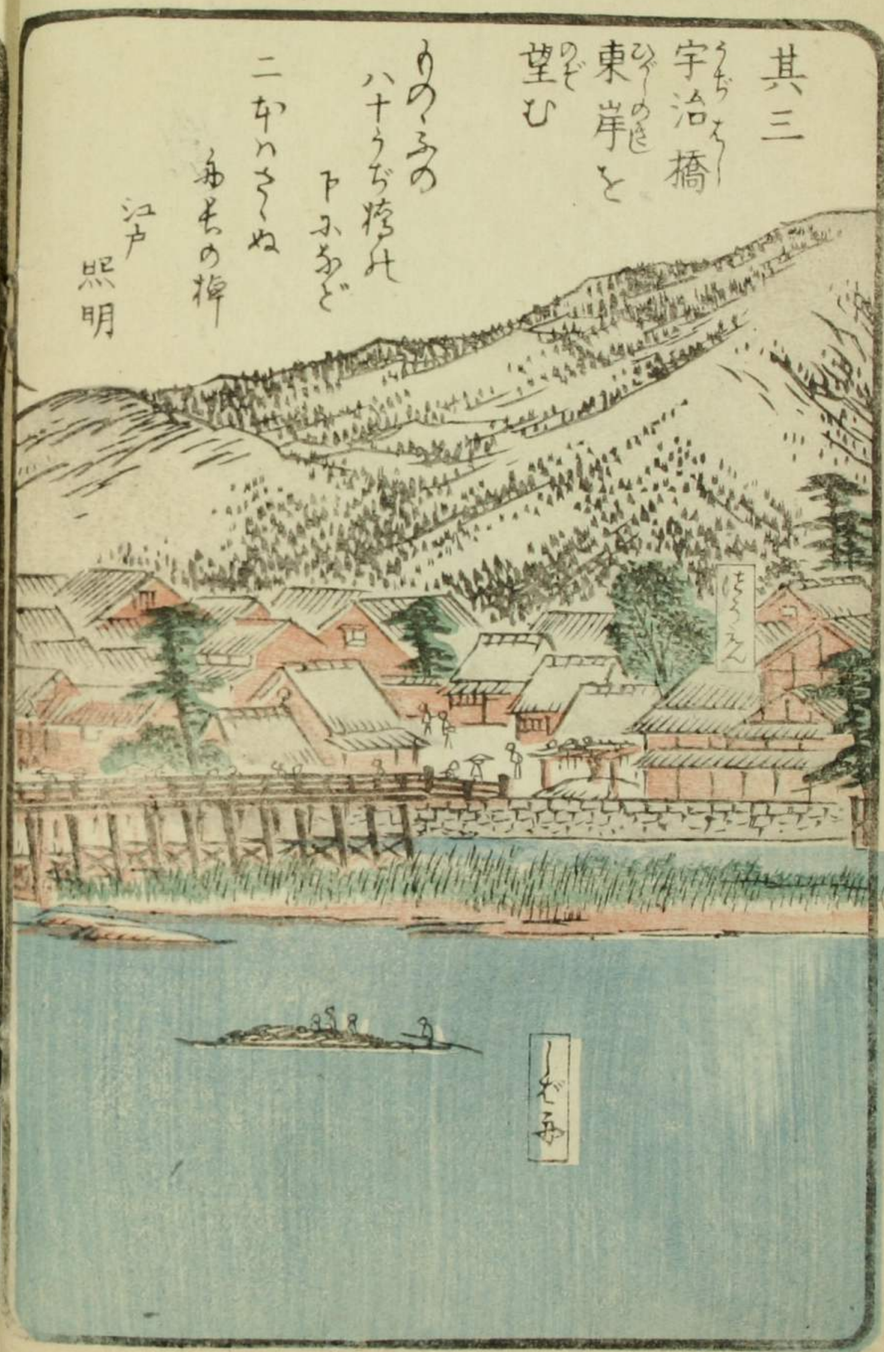


其三

宇治橋
東岸を
望む

ものふの
八十うぢ河の
ゝ
ふ
ど
二かはさゝぬ
あしの橋

江戸
照明



曾藉應真力
大鳩土木工
建稿思杜預
品水問盧同
吟嘯幽人過
叱叱遺響空
千年期濟度
功德自流通

柚木大淳

朝日山離宮八幡與聖寺の後山と宇治川の東にて此峯より朝日出て春の日の遠く霞る又中秋の月と賞し清光川の面より照て銀色三千界の面影

朝日の観音堂は山の半腹にあり

藤とゞ宇治の川雪ふるあて雲井まで見る朝日山かな　陸奥守言公実

紅葉ちる山は朝日の反射時雨て見る宇治の川波　西園寺公経　前太政大臣

宇治陵　観音堂の南にあり應神天皇の皇子菟道雅郎皇子と葬る所なり

延喜式曰菟道雅郎皇子山城國宇治郡にあり兆域東西十二町南北十二町守戸三烟云云

前にあり離宮の八幡は此皇子の霊と祭

朝日山惠心院　離宮八幡の南にあり直言宗瀧水寺と号す本堂聖天堂藥師堂羅漢堂客殿經蔵鐘樓まであり本堂の額は持明院基時卿の筆

本尊大日如来　弘法大師作　藥師堂　本尊藥師光佛　弘法大師作　惠心僧都像　堂内に安置す七十六才の像

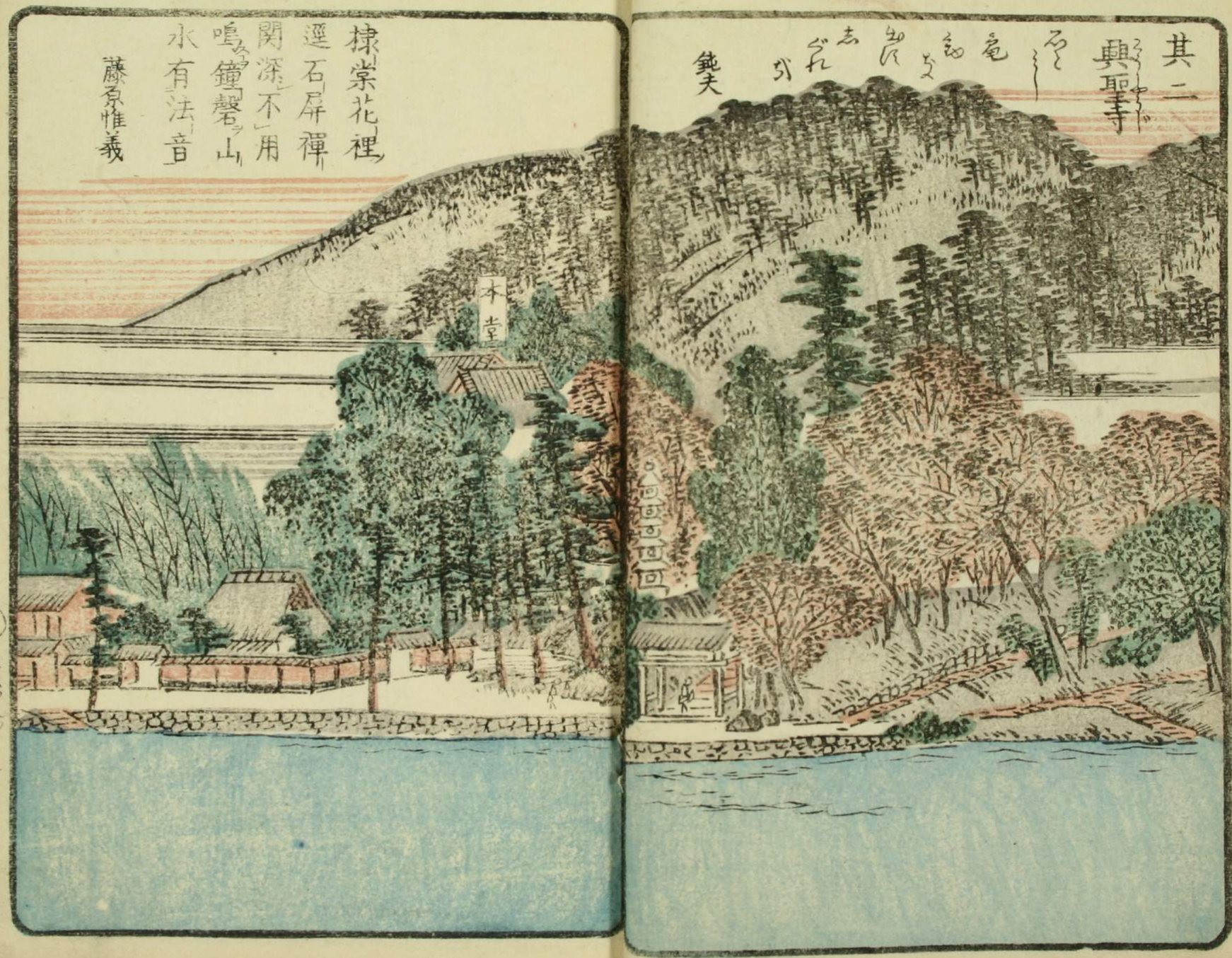
當寺は人王五十二代嵯峨天皇弘仁年間弘法大師の開基なり其後多くの星霜を経て六十七代三條院の御宇長和二年僧都源信惠心の中興に係る和州葛城郡の人にして姓は清原氏なり叡山惠法師に学び顕密の教とくきわめ一乘要決往生要集阿弥陀経疏大乗對倶舎抄曰明相違るゞ著し惠心院の作なり大唐南湖智禮法師に問書を遣れば大に感歎し答釋を作て返しける寛仁元年六月十日徒弟を集めて往生の期に臨り教義の疑を問べしとて皆決定るをもて其後傳とす

興聖寺の隠居

亀石

観流亭

亀石


其二
興聖寺
雙夫
本堂
棟棠花裡
逕石扉禪
閑深不用
鳴鐘磬山
水有法音
藤原惟義

上足慶祐法師をんとぐめて其時終をとげぬる事七十六時ホ
天楽空ひゞく奇香四方に散じ山中の草木おとゞく西に靡き
しゝへ趙宋皇帝伽都の道養をきゝて塔廟を建影像を亜しめ
給ひ給ふ堂宇
我ぐふもまぐ極楽に生れぬるべ知も知らぬも皆迎へてん　僧都源信

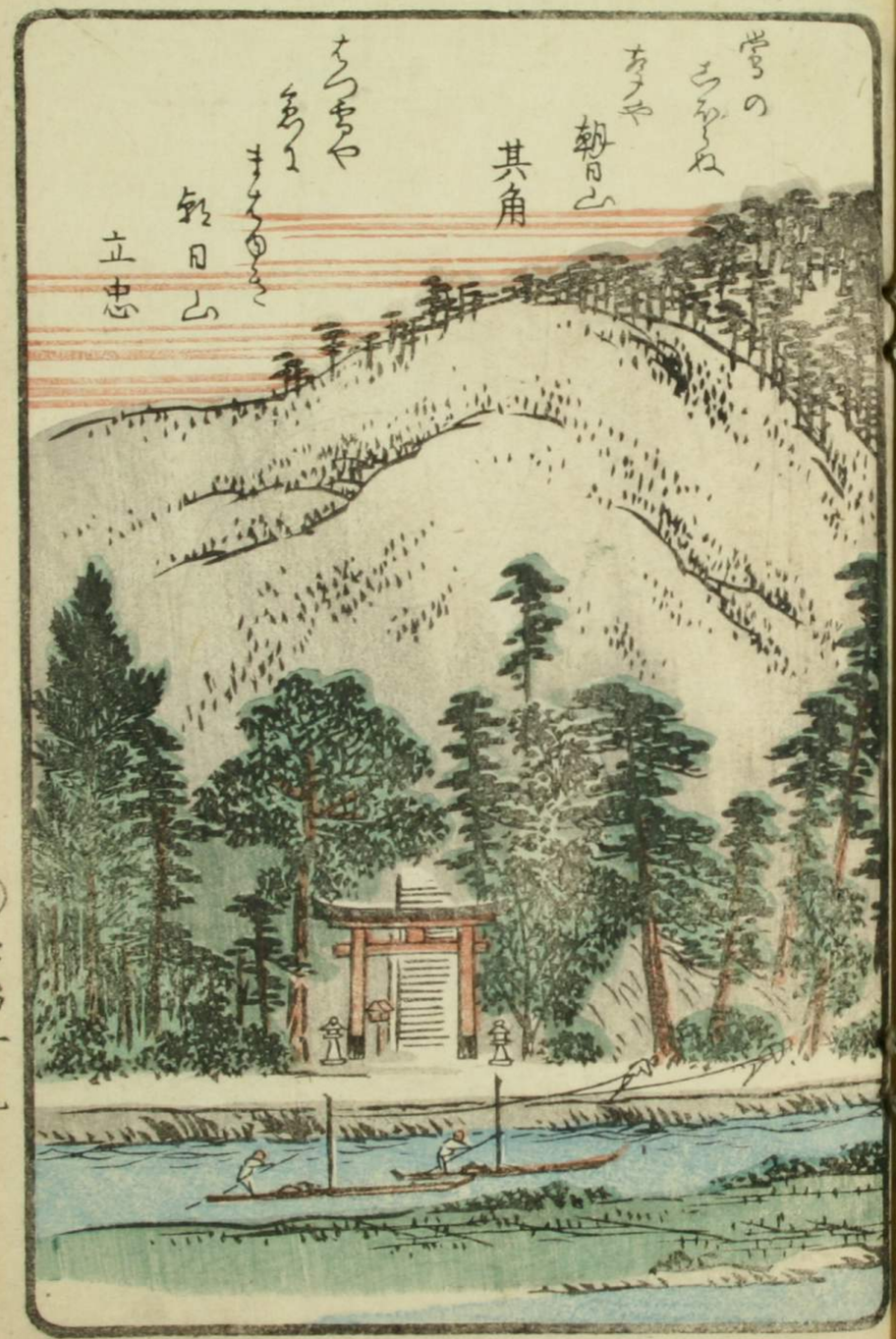
伊徳山興聖禅寺　恵心院の南に隣る曹洞禅宗観音導利院と号ス

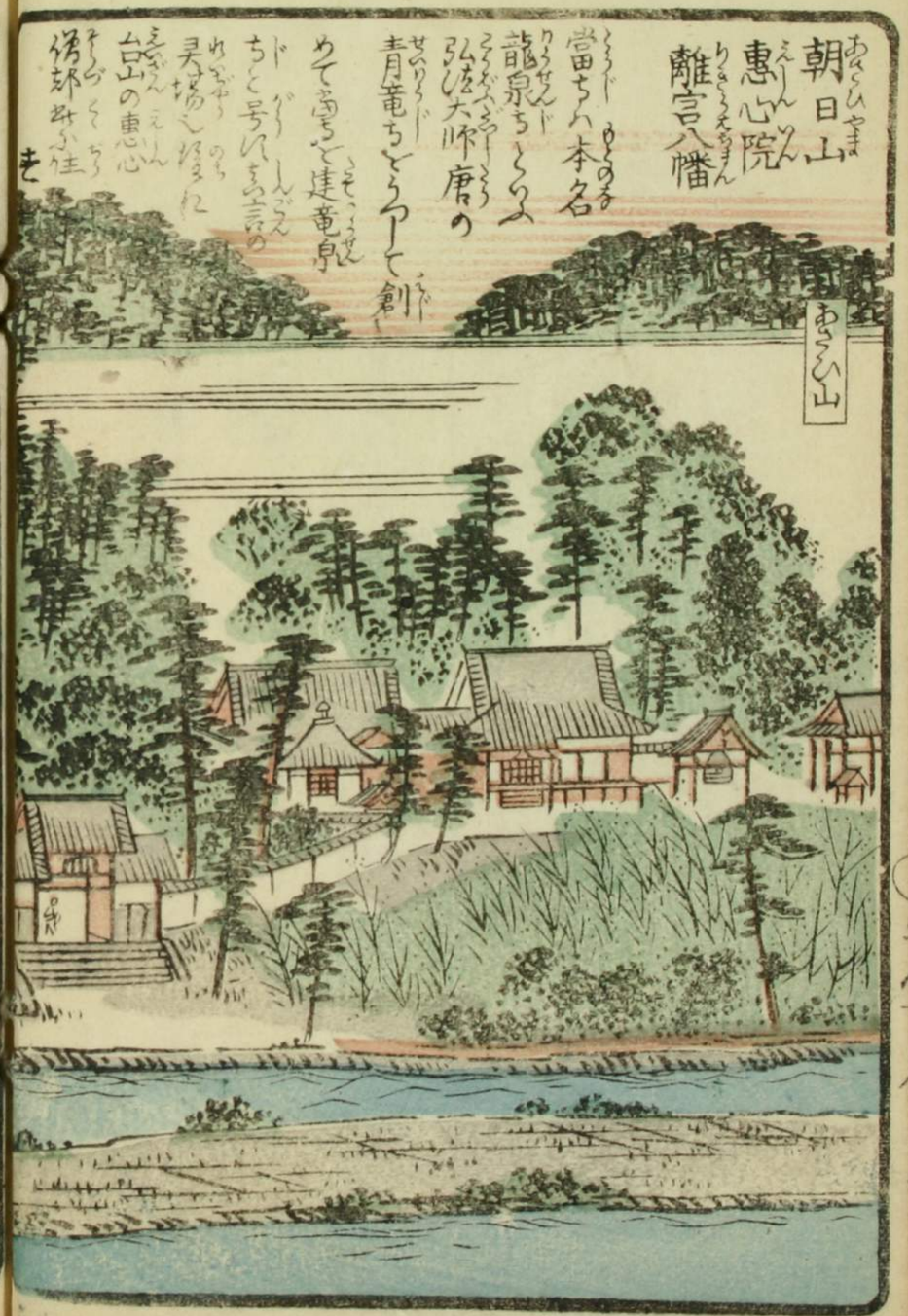
當寺八人王八十六代四條院の御宇天福元年弘誓院建立開山は道元
禅師なり其ぐめの深草の里にしゞ後世中絶せしと正保年間万安
和尚中興して諸堂は古淀城主永井信濃守直政建立なり川岸
なり門前まで琴坂なり左右に樵紀家とうゝ山吹と透垣
なり朝日山と庭中なり白樺とたるゝゝ龍虎とつゝ姫
躑躅咲ゝられて宇治の川瀬の篝火と紛ふ実に亜双の景地なり

山吹や宇治の焙焙の白ふとゝ

観流亭　興聖寺の門前なり宝暦六年の洪水に流失して今は古跡のみなり
佳境今従開士遊　僧元明此釈流亭に於て清人竺菴和尚に送る詩に云
問君楚水吳山勝　千峰萬壑眼中収
何似観流亭上秋　釋元明

東禅院　観流亭の上にあり


朝日山
其角
立忠


朝日山
恵心院
離宮八幡
あさひ山

亀石　観流亭の汀に形恵比寿に似たる大石なり水多き時は
沉みて見へず

橋姫社　橋の西詰に小社二座一座は住吉一座は橋姫神なり住吉は赤色の夜刃の
形にて合掌したる座像なり橋姫は鬼女の裸身に緋袴を着し左の手に
地と掘り右に剣とのせたる座像なり宇治七不思議の内此社もそれに
宝暦年間の建立なり　例年六月十日御茶師上林味トこれを支配し
さもしろふ衣かけくさひとや我を待こんうぢ橋姫　俊成
此青の評説とかくなる神を中抜に住吉大明神橋姫の外
通ひ読なる歌なるべし清浦の説に山の外ひら橋に橋の外
ひら姫に佐保姫龍田姫同じ妻に准ふべし一條禅閤の
御説に雑宮の神夜毎に通ひなるべしと暁毎に駿〻浪の古事の

ことなるべし又玄恵法師の目撃せし嵯峨天皇の御時男に嫉ける女
貴船の社に七夜丑の時参りして此河瀬に髪をひたし悪鬼と化し
ぬれと橋姫といふ宗祇の説に思ひかけなる妻に離れて怨
しなれも我を待らんと橋姫を妻にしてかたちにする説
なるべし又源氏物語に橋姫の巻に見へ准へ書るのに此巻付て
極〻の説なれども其論なるべし定家卿も宣ひなるべし又逍遥院
殿の御説も清浦宗祇の説に同じ佐保姫龍田姫橋姫なれと
三姫といふに深き口授の有て歌道の師にのみして明らむべし

網代木よりぞうゝ宇治の方へ下りて猶や寐ぬるうぢの橋姫　慈円

橋姫のとろも綿とよ思ふ物幻ふいざよふ宇治の河波　後拾遺

御茶壺藏　宇治橋の西にあり御用の御茶壺を預りをくこゝに義むし

東西十五間南北廿一間半傍に又御藏番所あり

槙嶋　宇治その西にあり八丁ばかり乾の方にあり川岸の堤と橋殿とにて世俗名ようやくるるるべし土人いゝにくに専らに流れを布とさゝれと業とせり今は絶てなし

宇治河の川瀬もはゝそ雪よ橋の渡人毎にぞ踏まり　基光

河風の夜寒の衣うちさゝびぬ月よぞあれ橋の渡人　為道

雍州府志云槙木嶋宇治川の西に在古へ土人網を下し或い網代と設け魚を漁ると業とし竹を編み河を遮り網に代て魚を取る

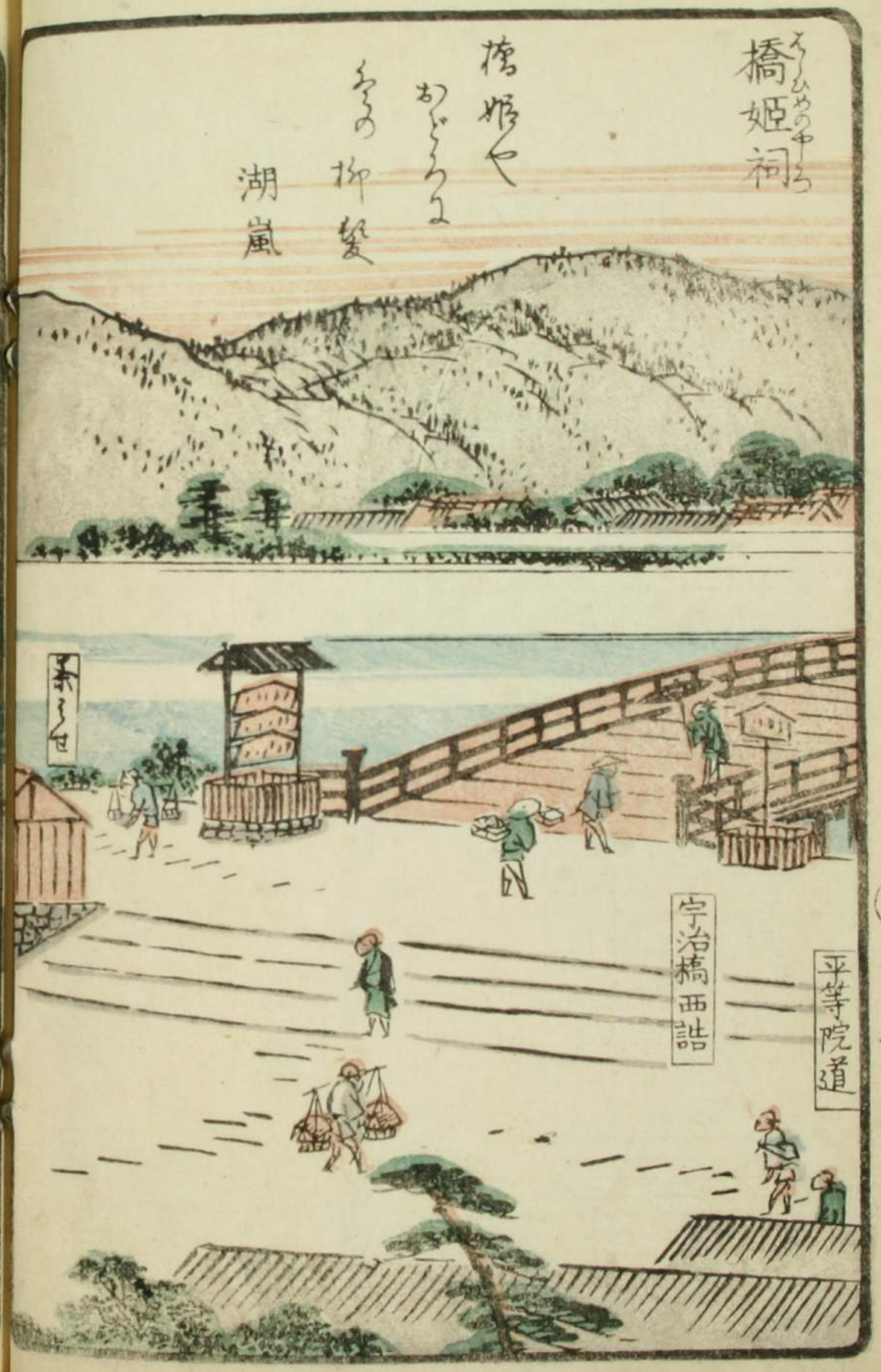
是を網代と謂興正菩薩厳尊殺生の罪を憐み土人をして布を河水に曝しと教へ是を作業にて魚を取ることを止む遂に網代をして宇治川の中島に埋まれ塔を其上に建て供養を修し其塔今に宇治橋の南河の中島に在云云　今浮橋の堤にあり

鈎月　槙島の内の地名なり今詳なるべし

此地は四面澎湃にして東に宇治川西に巨椋の江あり是を云云月と愛でるふ無双の勝地なり古人此名を賞して鈎月と号く伏見の指月槙島の鈎月に佳境にして一雙の地なり

橋姫祠

橋姫や
おどろかす
ものの柳髪
湖嵐



傳聞妬祠事
人情嶮於河
已有長橋造
不許百輛過

藤原正剛

鉤殿観音
扇芝

風流老将壯図空
陣跡秋荒露満叢
唯有多情一輪月
長懸山色水聲中

嶋椶隠

こうち拾や扇の
芝のなる
あるれ

宗雨

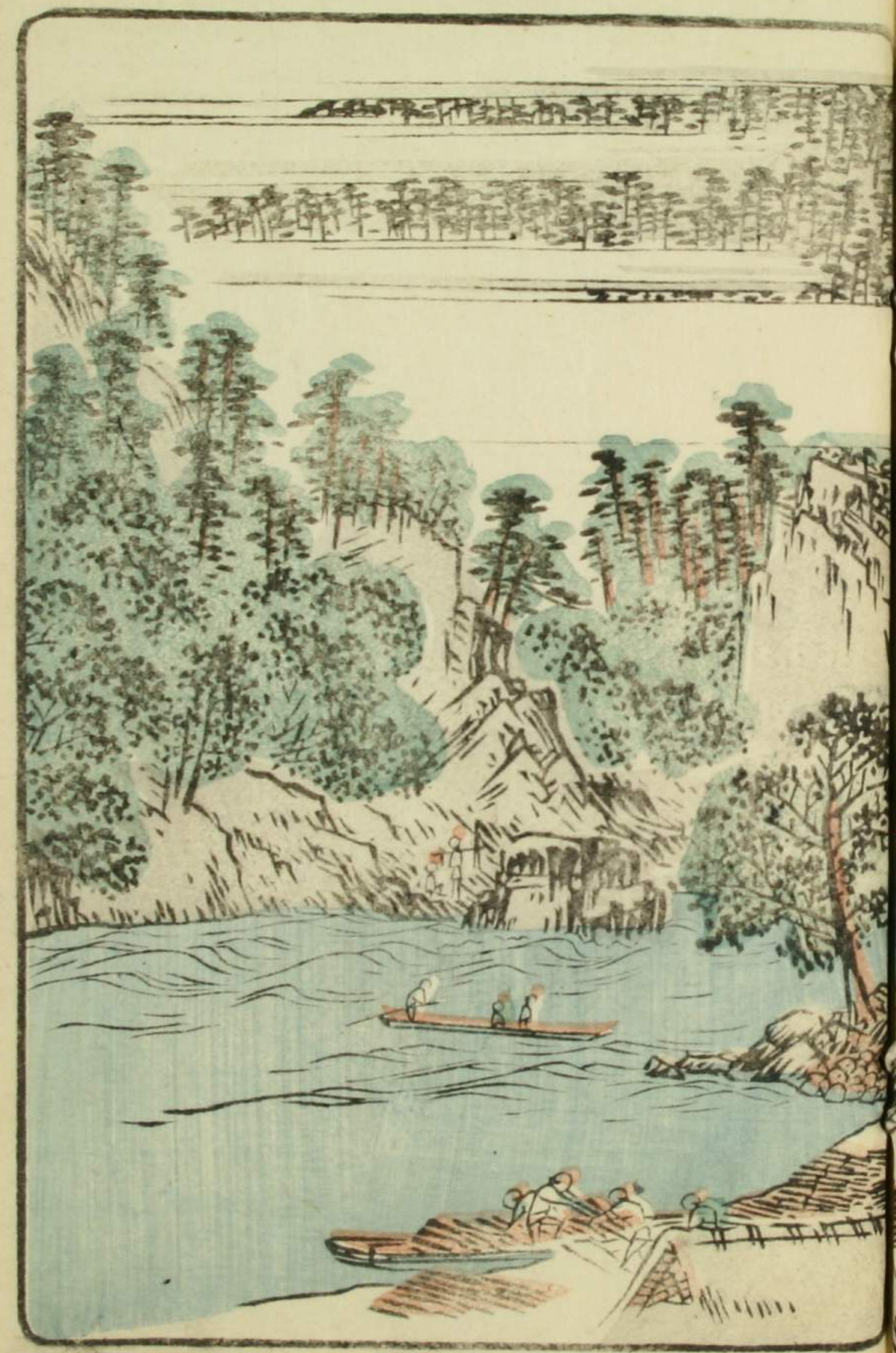
草所々尾上
ぞうる
扇芝

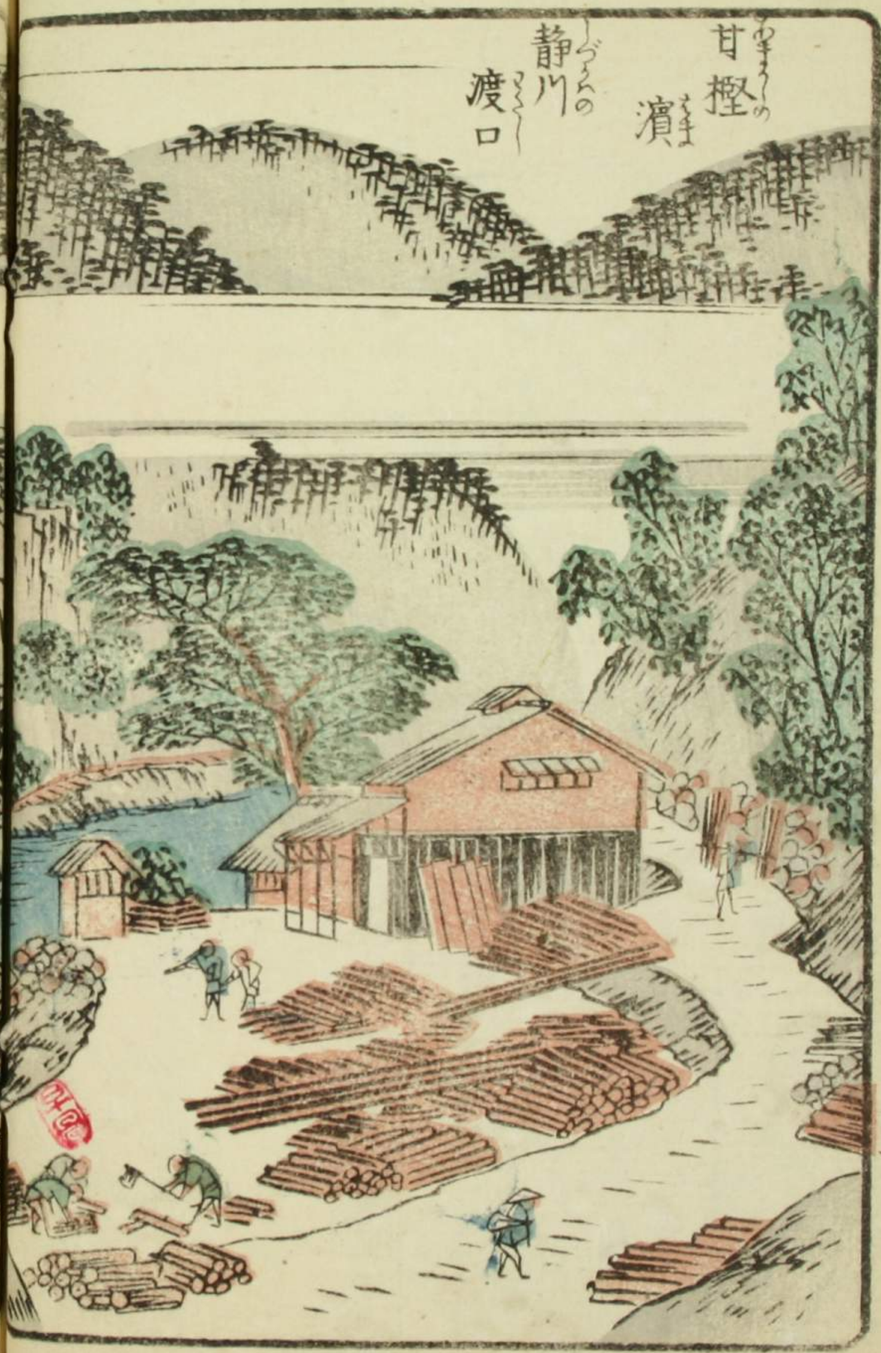
万中

平等院の
の面
鬼貫
鳳凰堂

平等院
本堂

槇嶋墨　天正元年　足利義昭公織田信長と敵〻なり墨とぎすゝ給へり
合戦利ありて信長のために滅されぬ
耕石庵　同所にあり東本願寺の抱坊なり　常如上人の息宇治麿の塚なり
母は一條関白照良公の女なり
橘小嶋崎　宇治橋の川下にあり
源氏物語に出たる洲
咲匂ふ小橘が洲の山吹やはなの盛りは八十うぢ人のかぐはしみかな　光後
袖の香や梶の小橘ふよもぎ秋の浮舟　太上天皇
平家物語曰平等院の艮橘の小橘洲より武者二騎引うけ〻出来る
一騎は梶原源太景季一騎は佐〻木四郎高綱なり人目ゐ何もよく
ぞうゝれども内〻先は心とかけうたんと梶原は佐〻木を一騎だにぞ
進んぐうは佐〻木をいかふ梶原どの此河は西國一の大河ぞや腹帯延て
見へさうゝ我〻緩なうと言られば梶原さも有らんと思ひうんと緩と
馬のゆぐゝふ捨左右の鐙と蹈透し腹帯を解くそ緩なうる
法皇堂　宇治の町人家の間にあり本尊観世音の立像一尺余と傳云むし〻
弓削法皇の建立なりし
平等院　宇治橋の西詰南にあり　朝日山と号は天台浄土の二流あり　台家は
三井寺に属し寺務は多満院御門主と浄家は宇治園白の御菩提
所にて心誉上人より世〻浄土宗と以て當院を守る
金葉　宇治平等院の寺にあるりて宇治よ宿付てひとのこゝろとあるやうてよめる
宇治川の岸のうぐひとあみぐるゝ　忠快法師
鳳凰堂　本尊阿弥陀佛　長六尺の座像　定朝作
廿五菩薩　堂内の長押に安置




甘樫濱
しづくの
静川
渡口

同四壁ならびに三方の唐戸に浄土九品の相を画く 絵師の長者爲成の筆なり 天蓋懸落ホハ
上三ハ色紙形にいろいろ親行の文と書に中納言俊房の筆跡なり 其外荘厳絵
七宝とちりばめたり 古代の仏殿なり 美麗なるべきなり
此堂ハ永承年中頼通公建立なり 四禄の災なり 南方の寺記に
當院の其初ハ河原左大臣融公の別荘なり しかるに其後陽成院此地ホ
行宮と建られ宇治院と号し又承平御門朱雀院も此所にて
遊猟しかの事本部王記に見へたり 夫より六條左大臣雅信公の
所領となりしが長徳四年十月御堂の関白此院を得て山荘と
遊覧の地にしたひ其後子息宇治関白頼通公永承七年ホ寺と
なして平等院と号し法華三昧を修せり 河海抄の大意

佛殿の造形ハ鳳凰を象り左右の高楼回廊ハ両翼なり 後背の
廊を尾とし棟の上に雌雄の鳳凰ありて金銅にて造られ
鳳に隨ふて舞が如くに鳳凰堂と号ハ則本堂なり
奥院 鳳凰堂のうしろなり 千躰佛堂 同北の傍なり 羅漢堂 千体佛堂の東なり
護摩堂 羅漢堂の東北なり 頼政墓 護摩堂の前なり
鉤殿観音堂 鳳凰堂の中なり 本尊十一面観世音の立像 春日の作 地蔵菩薩
不動明王左右に安ス 此所ハ宇治院の別墅と云 鉤殿の中なり 源三位頼政自殺
刻者と安置 佛殿なり 鎧懸松 鳳凰堂の左傍池の汀なり 源三位頼政自殺
扇芝 鉤殿の中なり 源三位頼政治承四年五月廿六日此所にて自殺
行年七十六なり 平家物語に

駒繋松　頼政馬とつなぎし所なり　阿字池　鳳凰堂のまへなる有池なり　恵心僧都の作なりと云

鳳凰堂の南にあり　鐘楼　龍宮より上りし　阿弥陀水　鐘楼の下壇の池なり　後に六字の名号の石塔をたてる

園城寺の持仏堂なり　本朝三井の其一なり

法華水　浄家の方丈の西　竹林の内にあり　楼門趾　九寺院の惣門北に向へり　焼失の後形ばかりに

旧記に云宇治関白殿通公此寺と草創し時惣門の地とおんぐ見えしと此院の

地坪東は河南は山〻〻西と後〻に高くなれば門を立るに北に向へり其例なり

やとに同尋　扨〻高時の秀才なりし大江匡房卿いまだ

弱冠にして同車に乗れり侍従居る公任卿此人に向ひて暴なる匡房

〻〻漢土には西明寺天竺には那蘭陀寺是は北面なりと申ひろる左右の

くれと問〻無双高名なり感じ給ふ故に平等院の門と北面に建るなり

當寺の建立は永承六年三月宇治関白頼通公し諸堂冬上に及ぶ

夏は太平記に建武の比楠新田両将ゆ〻尊氏と合戰の時義貞は山崎

正成は此の宇治に向へ正成敵に心易く陣を取らるべき謀に橋小島ば

後平等院の辺に一宇も殘らず焼拂ふに風大厦にかゝりて平等院の佛

閣宝藏忽ちに冬上にと云云　此時の冬上は奥院及び宝藏なり北門より

本堂にもつゝく楠兵卒に守護せ〻焼亡を鎮め〻見へしより是

故に本堂は初の建立より今に殘〻回禄の災なし〻總じて此地の堂塔佛

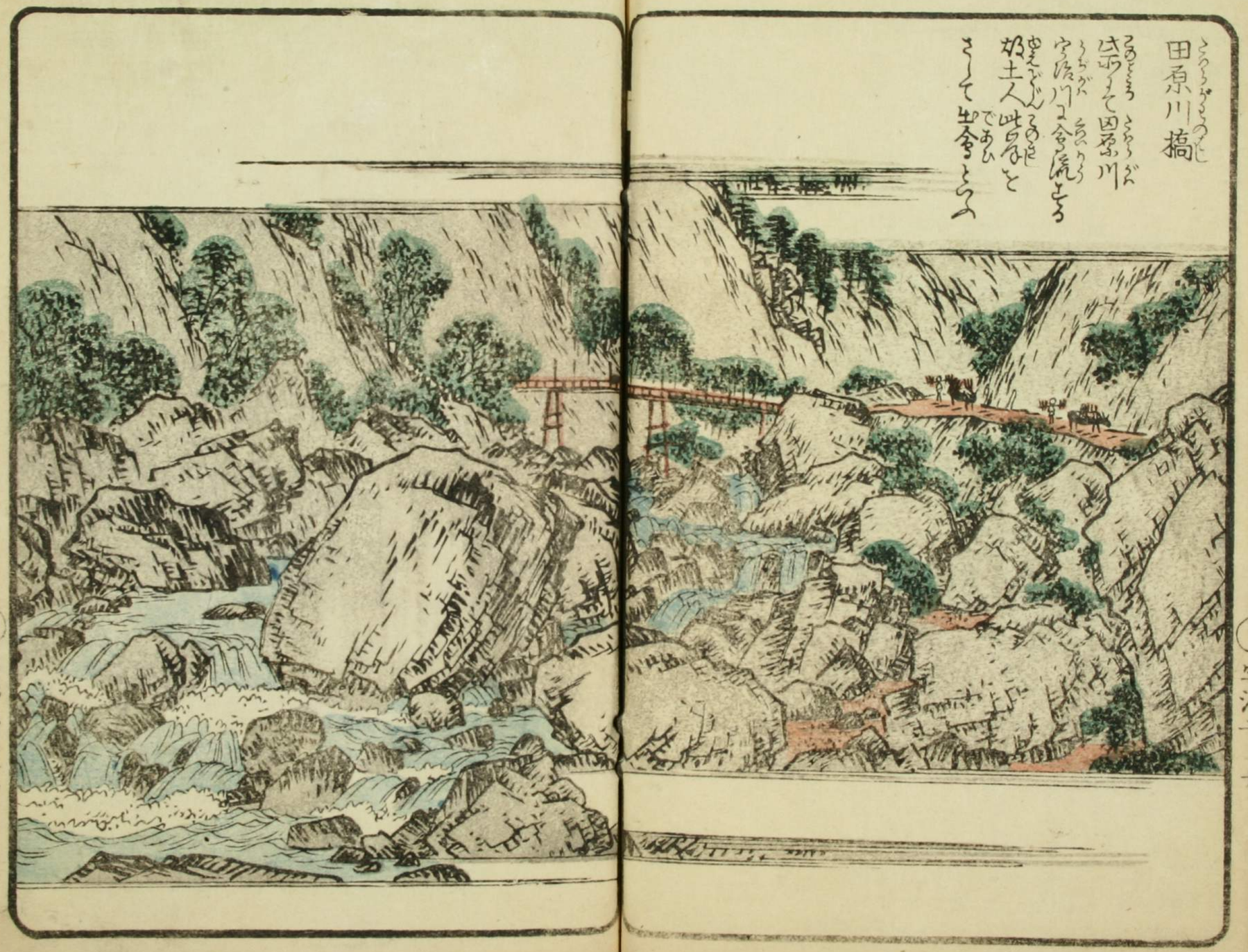
閣ひ〻に巍々として荘厳美麗都部に冠たり平康四年に三重の

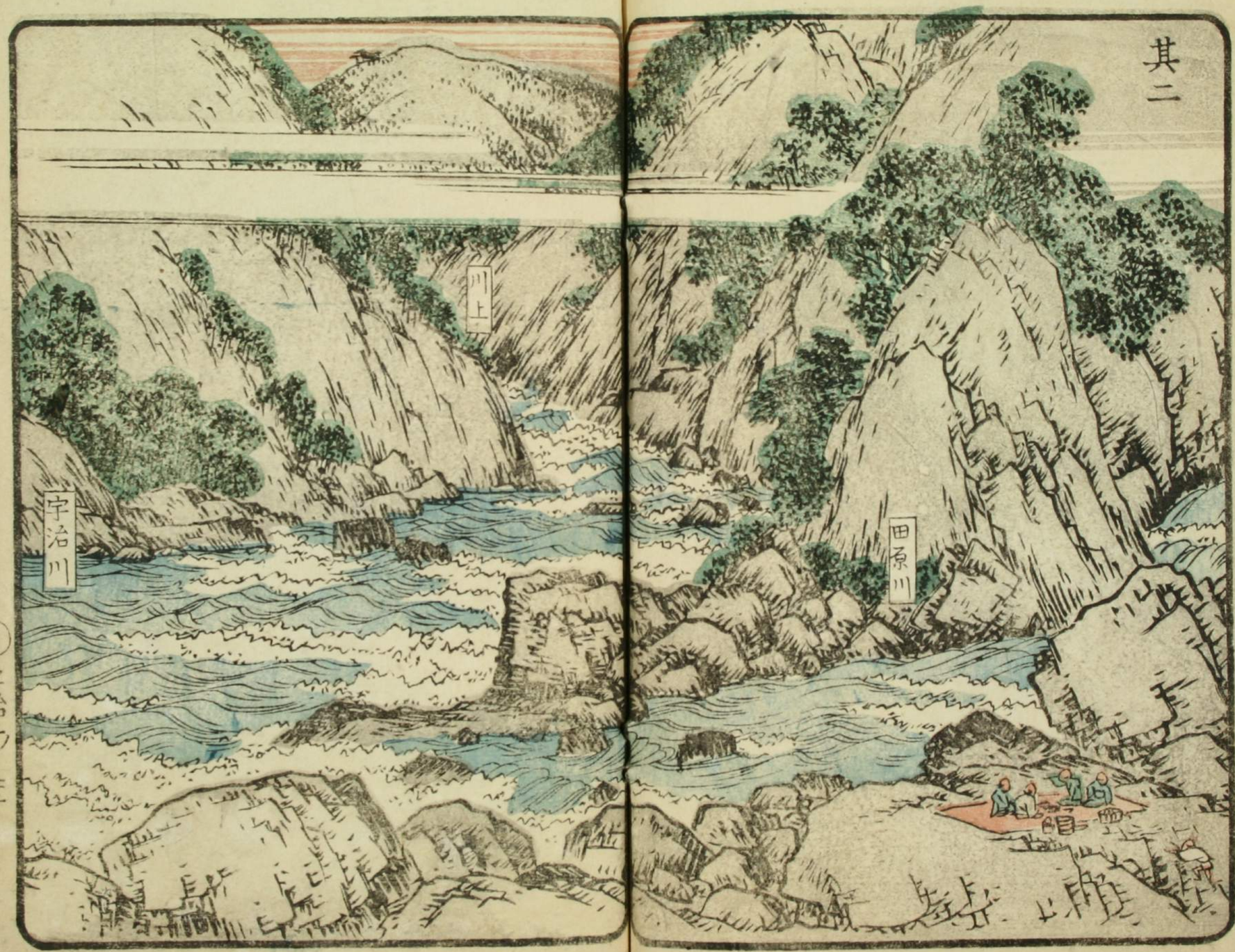
塔を建られ治暦二年に左大臣藤師実公五大堂をもびに鐘楼を建る

旧記に見へたり又源氏物語の鈔に彼巻六十帖の中苔菖蒲法

鰤汲場
御上二人
小結組
井舎
志ち川屋合

米浙


田原川橋
田原川
奴土人此橋を
さして


其二
田原川
川上
宇治川

其三

夕ぢまれ
夢清れぬ
月屋う船
六和

の師梭人指揮。ものとなん六巻の物語は宇治の宝蔵に納むと
なん今世に傳るは五十四帖なりと云云

宇治大納言物語

言と号し王代一覧に曰永保元年正月源隆国七十一歳にて致仕し入道し宇治に閑居し常に来り訪ふものに昔物語をとき夫を集め双帝と
世に今昔物語宇治拾遺抄号なり平等院の西方四町なり
宇治別業 宇治白水通公の茅宅は平等院の西の方四町なり
今西の字とるべし 池殿 嵯峨 御園 御畠 公文所 あの名存れり

宇治前関白
大政大臣

續後撰
宇治に住侍りける頃紅葉の人のもとに遣はしける
人のもとに侍りける頃
宇治前関白
大政大臣
思ひかねぬるかとぞ思ふ

縣の社 平等院の後西門の跡のかたにあり 祭神弓削道鏡の霊なりと一説に宇治
悪左府と祭るもの 例年五月五日夜神輿一基あり
保元物語云宇治左大臣頼長卿は知足院禅閤殿下の三男なり信西と師と
して常に学窓にあり仁義礼智信を正しく賞罰勲功と摂政家と
上下の号を定められれば
時の人悪左府とぞ申ける

浮舟嶋 宇治橋より二丁許川上に弘安九年奥聖菩薩梼供養の時
高さ五丈十三重の石塔婆を建る近年供水に漂流れ
思ひかね宇治の河瀬の浮舟のよるべあるやと 頼康

鵜飼瀬 浮舟橋より丁ばかり南にあり
うのひ船 武士のやそうぢ河の夕やみの 慈円

山吹瀬　浮島の向ひにあり融大臣此地に別荘ありし時川岸に山ぶきを多く栽ゑしより名づけしとなり

花の色おられぬ水にさす棹の雫も匂ふ宇治の河長　定家

散かゝる山吹の瀬に行春の花に棹さす宇治の河舟　西園寺相国

甘樫濱　平等院より十町余川上にあり此辺は田原郷より柴薪を運び出す場所なり往来の道なきゆゑ是より舟につみて伏見に送るなり又田原郷より川上の奥山は牛馬の道なきゆゑに薪を伐て竹の輪にて束ね川に流し此甘樫にて舟につみて運送す其薪を流るゝ薪をとる上竹の端をねぢて縄にして束ねる人舟につみて流す事幾万束といふ数をしらず急流に漂ひあまたひしめき打つゞき流るゝ光景おびたゞしくも甚奇観なり

静川渡口　甘樫の濱より静川の岸にわたる

行燈石　巨巖なり　静川の濱の川上水中にありて甚大なる石其かたち行燈に似たる

槙尾山　此辺にて北にむかひたる山なり土人丸山といふ

春来ても誰かはとはん花さかぬ槙の尾山の明ぼのゝ空　雅経

朝ぼらけ槙の尾山は霧こめて宇治の川長舟よばふなり　土御門内大臣

茶臼が瀬　此水の流うず巻ていくたびも茶臼をめぐらすがごとし　よつて名とせり

鱗汲場　静川のくらし場より二町ばかり川上にあり晩春の頃は於宮ら来りて巖の有るところ早瀬をのぼる若鮎を汲上げ網にかけて漁者つかひ鮎の手に入るゆゑに汲場といふ所謂一奇なり終日安楽しく侍中群要に山城国宇治の御網代より日毎に鮎を進むとありけん書今は絶て此なし

米淅　鮎らく漁の上にあり急流巖にあたり白波漲りあがりて其光景いかにも米をかしひ淅ぐごとし此石を下の米かしといふ

烏帽子岩　米かしの上三にあり水中にありて甚その形ゑぼしに似たる大石也土人曰此石全く水に入るときは近江の穂かしの米凶作なりとぞ

田原川　静川の場より凡十町ばかり三ツ水源田原郷の山中より出て郷口荒木高尾を経て宇治川に合流宇治川に入ると土人出合語る往来の土橋いかゝ下る巖石岨ちその風景いとゝ峨橋の下を石上に筆を煮瓢を頒け山水の奇観とゝめ人多し

○右田原川の出合より奥屏風岩紅葉が園千束岩不動岩ホとけ石上の米ゝ鹿苑　銚子口よりいろはまぐの間奇石怪巖とゝ〳〵真写〳〵

新流しの光景　獺穴　犬戻の難所と看〳〵讀〳〵出る

宇治川両岸一覽巻之終

著述　浪華　曉晴　翁
畫圖　同　松川半山
傭筆　皇都　鎌田醉翁
宇治川　摺師　松風書肆蒲

萬延元年庚申季夏再刻

發兌　書林

江戸日本橋通一町目　須原屋茂兵衛
勢州津八幡町一町目　丁子屋清七
大坂心齋橋安堂寺町　秋田屋太右衛門
同　心齋橋南久寶寺町　伊丹屋善兵衛
同　心齋橋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋北久宝寺町　敦賀屋彦七
京都三條通堺町西入町　出雲寺文次郎
同　三條通寺町東入町　丁子屋耕文堂
同　六角堂之前町　丁子屋源次郎版